

着装によって生起する多面的感情状態の構造 (第4報)感情構造の場面別特徴

松阪大女短大 ○川本栄子 梅花短大 家本 修
奈良女大生活環境 中川早苗 鳴門教育大 藤原康晴

目的 第3報に続いて本報では、提示被服の着装を想定して得られた感情用語の評定値をもとに因子分析を行って主要な因子を求め、着装によって生起する多面的な感情状態の構造を明らかにする。さらに、設定した5つの着装場面によってその構造に特徴がみられるか検討する。

方法 着装による感情の評定方法は3報と同様である。本報では感情用語全体を変数として主因子法による因子分析をし、ついで下位構造を明らかにするため肯定的感情用語、否定的感情用語に分類し、それぞれ因子分析を行った。さらに着装場面(通学、学外サークル活動、デパートへのショッピング、卒業記念パーティ、会社訪問の5場面)を要因に因子得点を因子毎に分散分析し、有意差検定を行い、各感情因子について着装場面の特徴がみられるか考察した。

結果 肯定的感情状態は「快活感」「充実感」「優越感」「安心感」「女らしさ」の5因子から成る。否定的感情状態は「抑鬱・動揺」「羞恥・逃避」「圧迫感」「不安感」「劣等感」の5因子から成る。これらの因子得点を場面を要因にして分散分析した結果、ほとんどの因子において場面による有意差がみられた。場面に適した服を着装した場合、会社訪問の場面では、充実感の感情が強く、卒業記念パーティの場面では、優越感、女らしさの感情が強く感じられていた。やや不適合な服を着装した場合、会社訪問の場面では、不安感が強く、卒業記念パーティの場面では、抑鬱感が強く感じられていた。